平家物語 長門本 六

リ 5
2004
6

門 2004 巻

宮内省圖書寮

平家物語第六

第六

建禮門院御懺悔事并丹波少將被召返事

俊寛僧都被留硫黄島事

附り加賀大臣儿事并辻風儿事

成經被參詣大隅正宮事

神切皇后御事

伯耆局事

東京帝國大學藏書之章
廣辻氏藏書記

平家物語巻六

建禮門院御懐妊事

并釈頼豪沙汰事

后腹ノ皇子ハ、ひつぎのみこ、ひるのおとゝ、ちゝ岩倉の院御在位ノ時、六条摂政の北の方、岩倉の大納言の子まうけ給て入内有しかの皇后宮腹の子と申、其后腹ノ皇子ハ誕生のうまれ給しを、三井寺に實誠房ノ僧正、頼豪と謂へる有験の僧を召て皇子誕生祈申されよ、其験成ぬ世ならば、ひるの御子を位に

さしけれは叡慮喪くらけ給ふやとして肝胆を碎き給て
祈念諸寺諸社に命じたまふ所々に仏神の冀
保元の三月十四日おなしく発すまに皇子誕生の
うらなひ主上是を聞給ふ有さらいかなる吉凶
はかり難しとて仏事をつとめ給て皇子誕生
別の所宣旨ありて三井寺にしかるへき
者ども仏事をとけんと申けり主上仰のかりけるは
人事いかあらんは仏神の
思召のとおもはれは是各外の所宣也皇子誕生の

りて祈をつとめん事多海内無数の夜を思しめす故也
今御の家を宣旨を山門に仰たりなくして世上おの
ゝ安へきの西川会戦出来たりて天台の仏法滅
かゝるひあんすし中御教おりけれは叡慮尤仏神
たる事なりにくやけるハ無事を申ん事ハ老僧なり
えんをくたれて仏神に思召に叡慮なれとて
水精七宝の数なりとおもはれ三井寺
まのを持て持仏堂に安置を移す主上是
を聞給て叡慮朝政おこなはれ及へり

山おかれた七宝塔の中納言国房共、時に災作ちとや
なるを言て教うを皇子従生の名しるべ国城寺
の戒壇を建立せんとやの御子世に出ぬるを
恩念を發すゝ学けれを焼涼うんきの世世のひ
そめうらく初めてん中と位おされけれを世そ因
縁の三世そをりのらたの作をたいたしくて教業
の高地に入るひとれを持仏堂の内の障子護石の烟
ふすまりを位のとおく身れを三をおかゆれを宣ちれお
の世界を位命をとかくとや入たりをれを射面のせん持仏

堂にたゝ出を祈んゝちしてをるこのゆくをしく有
なてをおの事すおつをる幕れ内のはい出を持仏堂乃
障子のらくふ内と物けるを出たるをみれをよりひれ
十有余ある位の三つあるの国くるみ位の正体を見たま
ちとにおを祈しけるの乳色にたゝ志をかれたる声をて仏
事をこの法位を天子に二言ちゝ一りんゆ位のとゝ
いてうつゝたとおを家を化出れかよの所をを叶すし
のゝゝんにを新出おゝしゝせる皇子を具ゝまいゝをて唯
今魔をゝ出ひるんゝとはのゝしやて海をちゝゝ三て入

にて王房カおよばれ給ひ御
位堂にて毛死に死けるさまやうとぞいひける皇子〳〵
かなやまの事ハ初おくらせ給ひ寺ハ
にて一乗寺ハ宮ハ戸ハ
まてハ加持の花を叶たる泉殿元亨八月六日皇子れと
〳〵歳にて後ハ矢させ給ひ教文親王のれ給ふ
此上ハ小説ハ西京三年ハ大慶正其時
回融房の御坊とかて山門にもかくれ人也ける
てせう〳〵を敬仰しけ代ハ我山の力

大ハ事〳〵ハ成就十の事にくゝ九条の右兼お
慈俊正の笑かさ〳〵ハ冷泉院ハ誕生ハ
成就寺〳〵ハ比叡山〳〵の力て両流三聖
〳〵せんけんハ他念なく祈精て日三〇七月
九日ハ宮安室子ハ〳〵の力ハ堀河の乃院ハ事也
ハ元年八二月二日にハ〳〵ハ思ハ門〳〵ハ慶三
〇十一月廿六日ハ長文に六二せ月の日十九日ハ宣旨ハ寛
治三年正月廿四日〳〵十一〳〳〳〳ハ元服の乃門ハ
怖〳〳ハ事ハ〳〳ハ生位廿二〇嘉永二〇七月十九日

廿九日に法皇小先に出たまふて羽御所の御見送り
豪の死霊のなすなり歟也と世時の人申しあへりとぞ
山門七社に寄て戎冠新にはけさりしのとてあるる
嵐とあり山門の聖者を合はる間此嵐を神と崇へし
廿七日 廿八日 けれを社を作へいたりて後の嵐さまかり
東坂本に移つ春の初にて寒時なる剋是也ゆゑ山に大
なる嵐をらいうる乱れたる乱れ
夢の如くなりて言語の報を感しるるもの也
つゝ慎へし〳〵治承二年ふるまり四月天三の後式いの

ゆゑ花やうに日出たるアし事共多まりとた左なりけ
あとをしはのゆゑ丹波かねを正月廿日頃世荒を三く京へ
上りの〳〵都にて待人もいつ〳〵ゆゑ〳〵とて急れ
けれ共ゆゑ乱の様はけしくて海上いさゝかのたりけれを渡つた
ひ島にはいしくて二月十日比に波羅児島に流て舟
よりおりて無所アの京にを入谷川の流水の色〳〵と
して無也當のゆゑ七位ら行とけて山桜分のみ
へそ春の春秋の書つる所共海人潮焼烏帽子
河の煙をたえたりけり故大納言殿の流（尋人々同給

れを國人やれうを始め些島にわたりせんとする見物の
うるさんとて是なる北條の伊中西國東に經谷川を帶に
ける吉伎七中山のふもと坂倉七郎との内悪訴寺番頭
地乃中に有木別處と十山寺の中に雑役免許俊定と中
者の吉屋に渡らせ給ひしと兼ねひしかりつる世
ふなる世給ふとかけれをめ將内老うしとよりかなりく
おほしてまつ初父大納言おはしまする氣をこと入る
ものを庭にを薄の立ひのをてをたけのいりに竹のかをとをひ
見たるなり此のさまを見山也いををつたかるの音幽こ
として絶えなり岸を吹ずちむ嵐のをちかつ〳〵てんなし
いのはのをうを忍ばんするかるかれ花と袖を寄りかの
ふるを夫の又舟に乗るかのかの木の葉をたつをを入てみ
ぬ〳〵を是又〳〵て寄るかるを吉川うるせやをかを氣は数し
おそ〳〵なる事うと後世)りいを〳〵をて内に入てみ
給へを古九を〳〵をを内に入てみ
是を故大内戸のうをあのれたるうをちをのに涙さの
とうひけれをの袖を西をおしかてを立の花と合
殺れを出る地ならんせをとすめの(小判官入を拾

みれば海水磨こと[illegible]て月光如雪をうつし
万たる巖雲まことに風景梁のひゝきを奏す雲
東天かゝれば西海よりかゝる地獄の苦しみと
なる修行九品往生のうたがひみたりめ〳〵名月蒲団にて
蓮と成るべくさまる孫敷苦行のうしてをおとろすとの
かれたる是をうたがひまゐ雖程土砂未洗土
乃ちかおを〳〵まけるうまとのたりかれ思ひの中か
ら心中すべきおぼろ〳〵名月又つるよりあひけるうと覚したるうち
七世しまで育まる出家因世なる信とうかのとを出れる故

入道後の北白川殿とれ[illegible]まの〳〵[illegible]ひへと中き乳をのみ[illegible]
よりてあまりとよ[illegible]まあとに父の[illegible]ちの[illegible]源尼
下りたりけるとも[illegible]れ信俊の郎[illegible]くるりける事を
[illegible]の[illegible]の[illegible]れたりける氣の西乃[illegible]
日数を[illegible]とく世[illegible]たりけると[illegible]て[illegible]
とに父[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]
この[illegible]ありひ[illegible]けられけ
はるかゝ主に[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]れ

屋すきの入口

扨また恵比寿の後ろ姿の絵は、ちかの里
はるの兵いつくさと同じへと墨のしたの一むらの雲の度
とやはれたる水の流をあさへと家を引て尋入かへと家
のあるみさかの流ひきはれ岩素かおりなる家とあるとも
おしまたたれかたに三へ紀おれに卒都婆の一とともみへ
すたいはの乱出くたよてし建むらひ紀きたるこけふり
くさるる外ちかをとのと入へけるあるをあとつる春ひて
独をあまおしのうくかみさもせひなの利宿入なる見をみて

ゆうにおしくて十万源のたるを書るをうり少拾
せくくくのうる波をおさへさて後中國とたのりさるへ
北と某しうをやうらんと伝はう紀國をくやらんと伝はう
そてれ元をる事をおくとるのとおくたのりくる張い
はくまたをいつるう刻へくまつの方へ流れて後うを
へ乃島を里をうくあるせをいをの下僕島ろんとのお
刊れくとあるをたうたるりいく心中のおくさいを
くはのうせりへ一万里の波をなる鬼界島おれ
くない一日片時のたへくなる笑へいなりしを尋ま

なりとおもせたりけるうや[illegible]の会式すして三年を経て
ただひ都へうつる書をみる事よりあれをしるべ(たおもら)て
ひさしらぬるうんをうんまうこうかなしかるべき命のうのひめは
はのたとひ定業ばかりの命やまるとうまれの秋より
今ゆくすえを見るとうんは是をいふべきなるべし
ゆくすえのみをまつ[illegible]たえんとしるべき人よりもをいかに
にたるのまくうそ[illegible]すのうくとれのより表風よりよく
表の言をうそおもふるべく人より文ふかく歳さりの事にまた
罪ゆたかに搔消の世をうしの思知夢如幻而無をれば墓

七今の涙未乾而無宮、想像苦七底枯骨尋声而無
益徒開墳墓大風大雨のうかしけれあるはなきりなりと
開るうんは、いかるる火の中の底よりおそしまたまおとろ一
言のなのうへたる生死をへたるの事ならばうかしるれ
とのなのしておくく舊苦をもうしもをいれ父のなあと
ようすすのうつる特せられたりるなとうしるせてかのうの
別前院主光弟坊の石塔とて生前を語りてうやをいささ
る亡霊没定といふ文七下に無なおをつとの事に
書のひとそうふ三ようくたぬき上寺して又りまいるぬ事り

墓にのり屋を作らるゝ事不思議なり
去聖霊等正しく教誡菩提とゝ乃至十年に
ゝいふかのうれと思い給ふ人々の志のそ
こつのめにいさゝき絵をゆるさぬもこゝろ八人の名残も
おしく思ひ給ふ人々の中の方々はすの
おわつるくにひ給ふ元者にとゞめてをく侍るを
のあれ出ひたり都をつれ侍り川けさ物の
れいはれ世たよあるべる宰相のゆるこゝけんか
をくあり給ふとてひつさきの手をむひて人をし

て言うるへ乗船なんの通る時おろ人やおそするおと聞ける
人のけしきあれ道ゝ世ゝあり乃至三月十六日にのぼるすゝ坂を
はるに宗頼小弓殿の宿所へ急ぎ行き
おかゝれ共三ひの百姓まてゆやせおとゝ
に乗れ人重なつゝて宰相乃至（文を給はる）
とうくして十三日にて坂を上へ盗ひ人ふくろ
た牛車あるへしとゆまれたり乃至宰相のもとに
ゆるのはゝとて乗せまて つれ侍り 吉侍弟かれ
乃至宰相を海へ入りたる人の中ひ物ゝ

福原へ御下向ありし比おなじ頃より此今の法皇よ
り院宣ありし侍ひの比おみなえしの花さかりなり
ける所へ
七夕宮の御まえにひるとかいふる所やうの物ども
入せの御所やとく心ありしかけつる中分れる
新大納言宮所にみやの内山さとうの加賀守たとた
ひのかしこ者ども中に宗盛卿山荘に晩更に方ず
花と地形の上無をもつ物ども多くよろず感大納言
十八ひきしきて例源爲とかつけき作り無花なりし
言葉ばかりの宮所に志はしらるるつしの四条た
ぬのへ行ひ物ども行ひ内まと所花との三とせのかと南さり
入おれと古意おかとの花を四月入かとるを花は此三月
此中の六日乃重ねを楊梅桃李のをり折ありのかるこか
ひとかつ〳〵くらべ十の百姓七声十とふ老花より詠き
人ないはもおし庭の樹とにちりかりて中さかりかと
かすのふかれ花かれ内へ入をみめをを花を門をの花より
ひとかし〳〵ついちらの花共おひからんりんみ花て堂
高くかつ世や花と新源り四四十機業を話ともてや
寺村御ゆ花をひとをり掘りくちをを志と弁とり

おりけり剰にも志の千字おひたり月られとて八字を
花いたくまてらに成ふかり庭にも人跡たへて秋わかし承た
りまかふへ寸千萬生く跡なたる語なかし柳はちの楽
豫藷ひてつらの席ヱ暦成すける故大納言はれより故名
出られしかと妻房おりしかとも故大納言の家をいきられし義なし
つくしとおりひつけ給ひたを孫子流流りる大納言ひさう
して住吉のすみの江原をうつして逢させられたり去戴嘉
保二年二月廿一日に事始ありく同三年に遷幸りあり
出しても廿日とやに法皇御幸ある大納言家にて御用是と

過すと思されけるは折ふしあそおかしも乗せて法皇の御前
にして八葉の御車を召て御牛にかけさせられたる
御牛かけ是御車皆具進らる公卿十人にせられたる
以南庭十疋被上人十六人に各置馬一疋課馬一疋ありて上北
面十六人にも各絹十巻綿五十両つくさられたり下﨟
北面かつらにも色くの装束に白布十たんつゝおくられたり此か
者に禄をそかひ御車そひかんとう中にも牛飼眼五百貫出され
たりかうきうぬいといふものをおもとりつゝ是ひわれけれはとり
なれて後に夜桜の酒宴ありさうに夜さりにたたよひて一つ乃

ふゝ記事法皇南殿を出給へ出て給へ出給ひけるに
人の侍ふ八十有余なる老翁七位殿をいたれたてまつり
参りて記事ゝ事ゝ少の禅よりてまゝけんりんや
乃至記ぬしよりてまゝけたをたをそのかれて元
はのゝ法ゝ事ゝ思よりたりまゝ人かゝる人
物をゝ云ありたる言葉ゝ法皇五百をきゝ物仕の
者ゝ法ゝ事ゝ物ゝ記ゝ言ゝ是ゝ住吉の四ゝ
世ゝ法ゝ事ゝ物ゝ記ゝ事ゝ推参仕也
我ゝ事ゝ法ゝ物ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ

ゝ記ゝ住吉ゝ世ゝ下ゝ記ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
ゝ法ゝ物ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
直参仕事思ゝ
ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
ゝ記ゝ住ゝ法ゝ物ゝ記ゝ
大内言ゝ者ゝ為ゝ山ゝ木ゝ法ゝ物ゝ記ゝ法ゝ物ゝ記ゝ

時御幸なりて拝まれ給ひつるなれハ住吉の玉つめを通りたまひ皆
うやまひのよし此聖乃法華よりの明神乃やとめとて上皇
つぎには脳やまうせ給ふれとも御存命のためにはも出家あそはしける
と聞召すへし法名は念阿弥陀仏の明神の御はからひにめつらや
いふ様なく御信かなしまします給ひけれは法性寺の前の御
れも今は聖子の菩提をねかひてめいよく恐しくおほせ
覚しめす御子又の御心へは昔しれは人訪ひなきを
露なれやかちはやきの中の宿るにおほけなきれは夕陽の朝夕のそにかれ
あんとして夕月夜かけにすの声を聞しいひたり桜梅は

やみしといひて祇園山領にして雲涼の袖志はるたそ
やまゐに世をのかれはしけれは下人東山の林寺と申所に住まいな
かりて御草の庵をむすひ念仏一向後世をたのみ給ひしとかや
此外は他事はおもひめしす知堂雲居寺なんとへ御参詣
ありけれは御ては常にたつねゆき給へ性照か世を渡りまてもつね
には六波羅辺へはまいりてゆき給へしとて七条ひんかしの朱雀かたへり
て東山へ移り給ひけるかゆかりは六波羅へおもしろかれは乳母も無条ハ
く頼みかほしかみと志頼みてみへける心の方めてもの外にやせおとろ
へ給へて思はなるに泣此頃すくさるる程に思ひ出る所の哀也わ

うちうちにて時雨るあり〳〵天君すかみそひの十そりあり
〳〵おひたちのくゆ宮とにあり又とそれ給さり給へやめ給
ひたひちうくるつゝけはを有り又小のうち先生三たり
ある者おい人おそ〳〵きけるたとそのひろれに和の市見
ものとせにうるみをあのうつゝやしを金をちうくふる
うされ〳〵時人くるし〳〵金〳〵彼の内ありし世れく人とあり
にるうし人のくれれを見るたも法華経のたに流
かをを世をうるあ〳〵三臣宗憲羽とう二人の高坊地天
皇山に乃居るから人とすを学れく山乃中に道

ひ〳〵に谷川かさのつれ乃ちれいてけるをみつけて人家の
をれ事をかのく其所をたつゝ行まいくをを
屋す〳〵て一七仙家にたりたり樓閣重五として
草木りみの表れ京音をうして海うんを九地と
〳〵を仙人いて〳〵坊るへ乃居をかし〳〵地乃山を出をこの
ちとをうへりみれを人すすみるすたと〳〵物をしるの坊た
ありまり物ちまう〳〵みてくはしく物をたつゝ名ハ
坊のるかしいてく我ハむ〳〵山に入うせたし人の老の名ハを
世の孫七とて言へるかれ今変の宿所乃荒に名る五抵此

人もの人とおもひ給へるを見ひらけば彼仙家の後人
人化して変化中に人をあはされるかはをいつしか
四氣に乗りて君ありかの存をしらぬ世界を
左右おくりまいり玉へる法皇いつしか見せたまへく思ひ給へ
給へ世に帰り昔りて百れさり参り列宮入りたる東山四辺に従て
つくづくと見れば人の姿は結びたれ共極楽〜草木も
盛に咲乱れて小夜文るまたいつまり月浸るとも人の
沈れを　古の彩の板間ふ……かはの世の狩衣〜く
惜まれ給へ人の出家の原く思ひ給へおかく〜

○六波羅の門脇殿は別て御重ふかく思給ふ故に
あれ式常ふかりしを法皇と奉上
斗を揚て用ひ給へ〜ける○

多都河の辺に流る後十三日の程がやあり人かはのもと
八条に三ヶ月の間十数日庭に重ねたる人
人を伺とおく又おれはのひけるやすより入る毎の
歌ふ中をうるく世界人を我子乃袖にちらせて三
とを祈おれ〜る世後〜攻京の思欲に向ひのち
を捨ふを世と今世後をもたの思に捨れ
発心の中へうさ捨て老のおもに袖を思ひ〜さよ
有〜時義命の消たるすの二度捨思ひ〜と

法ゐ〳〵みなれと母のもとひさしく思ひ屈くんを宇和入道の
袖をおさへ参りける使者二三度におよひ礼かはるのあり
其事いとなのとはあらぬ宰相の中の方かるの北乃方六条
より行いとおもひ出〳〵む見ほとかゝるとたゝ島にとゞ置
たきまゝて今一度のひ参らんしけれと又めしもつかふ
て失ひをりておけうん事たをろし名れ嘗時仰事を
入道にあはせにもあひ合れん紫とそはゆ身に物て
ら出〳〵申ける〳〵大納言も矢ふとても時の
程立よりせ給へ（中略）

とて去れと二度り返てもなを泣つゝ世をうらせあひ〳〵の此
あるものいりあるつれなの物のりのちんすちんといひ法けてお
申〳〵む中ほり宇和殿ひるとの物のおりや一上殿あの御と
てうせあ（中略）をはしにはあ物つゝ申りしかたに程か
く遠されとうの島におちられに申其時乃ふくゝ
の思切（中略）を思愛れ乃力おとも事ゐれと思ひ
けて人の者〳〵ては乃中陸を何とも乃ほ也
ものれと又嘗程おさの事に乃（中略）度が持いるまの
りてのとは嘗盛と本ほり申高野殿御とりとち

すりうたせていさ程ありぬなりひあれ共つゝ念佛申て
後世をたすかるんかゝ時の後生をうらふ〳〵とてお記
ゆへなり時乃小のすけ乃有孫を召寄て四人伯しを
今に初めて事ゆへなり是程まで出つるんなる共
けおく共出さいと〳〵くてまかくこゝ法花ゆへ
法花をとて五へ花に成ぬ〳〵丈者て〳〵氣をかゝ浮
世にてはなりなしいなゆへ
罪おそ〳〵ひやうゆへ
定て死罪にさせゆへんすらんと今はかりの命かやと泣

出〳〵法花理なる叔父將西八郎に出定〳〵たれを案すより
入乃共こ世門乃廊こ入をなのおうゆへめを召すらんと思
給氣に大政入乃いさ給ひ君出す上居して出すくなりく
人やゝとのさしをゝ越中ゝの司盛俊とて桑たり出酒まうる
なりとのゝ花と急こ用さ〳〵たりけれとにや瓶子一具に
種〳〵肴結構して出されたり是ゝ仏の事なるらんと二人の
人こゝお記なし〳〵ひけりさ礼共事なるゝ細なるけり入乃酒を
十〳〵めこ給こさるすひを中こ成こ礼をゝ將西ゝ馬十疋に
鞍を置こ其上にゝんすよく仏今こ死羽ゝんとのゝ出られ

ゝり屋すゝりて入道のりてゝおさゝが持仏を本のごく
ゝ堀せてたてまつる重宝を三千石をゝくれるかなをりて
おちうく仏の故むと尋れども此が持仏男子が持ちゝ入道
もちいゝのひの会者也此が持仏を三〇程石をつたゝめ(ゝ)
思をるゝ所のゝりうつゝ宰相の石をゝくさめんらなのゝかゝも
ゝおきるゝと地蔵菩薩入道殿事ゝにゝゝ比程相れゝん
いゝゝゝ島の晩定ゝいゝゝゝるゝ氣にゝゝけれゝと宮ゝ(ゝ)
が舟のゝ島とゝゝゝ山高おひゝゝ火ゝゝゝ(ゝ)ゝゝゝ
ゝゝゝ雷にゝ雨ゝけゝゝりて物ゝ氣ゝ一ゝゝとゝゝつゝけゝ法

ゝさしゝ入道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝく思ゝゝゝんと大ゝゝひて内へ入給ゝ今ゝ別事ゝ
ゝゝゝゝゝゝ二人ゝて出ゝ先使者を流のゝてゝ持ゝる故
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝるゝ持車ゝゝて入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けれ死ゝる人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
入道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ石の出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

中乃女房にちきつる人々、少将をまちかねて露の命消なんとす
して同し世にある人にもみる事にや、いかなる島へと遣し時
も二度あらんと思はさりしに同し君の御代に出仕せしめける
事のかなしさよ、かれはかれ、それはそれ人々袖をしほりける
院は少将を御前に召して一目御らんして両眼に涙をうかへさせ給ひ
かねて少将をお召しに学問ひて勅命をかせ給ひて生に御有様
哀はしき法皇は先とも死罪にもされる島のてうはういか
は波しを去吹風のすさましく旅泊にゆめをやすめず何事か
流けても一百露命をなからへん為也今日は少しも君を思ひ
まいらせのちに縁のむけるは哀れ事いて涙なくなからへて能
都を拝み奉らせ給へとせ申されたりけれは理也とて哀に思
召さりけれは父大納言住吉にいのりまいらせし事にあいけれは
にやはかなき命のかへて万里の波濤を去の御所へたひかし
なけれは父大納言乃家をつかせて雲上にのほる身は中将に
なりて後まて祖父故中納言にてなけれしとおそはるく
人あまたいられたる所に常花の家にかへりてなけきつゝすむ鬼
かいの島へもあかりひをおくさめなれ

俊寛僧都被留硫黄島事

附加留大臣事并辻風之事

扨も志ゆんくわん僧都はのせつみやうく方人もなかりせ
ければ非常の大赦にもかれて鬼界か島の土となり
とゞまりてたゞひとりかくいのちありけるが終にうせにけれ
其中にをにのまれ給ひし事僧都世に有ける時多く召しつ
かひけるものゝ中にもとに不便に思はれたりし童ハ二人
有り兄をば亀王丸弟をば有王丸とぞ申ける彼ら二人は越前國
水谷の庄の住人黒居三郎が子也舎兄の水谷ハ法勝寺の寺官也
此法寺事上て候ふ自身がくだりけるかの黒井か子

共を召のぼせよと仰せらるへ共かくりと上てこれにゐさせよと有
ければたてまつりけりかの童ハいとけなきものにありけ
れば上るまゝはつかれ候ハ兄亀王丸は子のごとく思
はれたる中にも亀王丸をかゝしにありて法勝寺一の
阿闍梨にも成なんと思ひつかひ給ひける
ほどに有王僧都の流され給ひしにもとまりたつね
行く末いかばかりのいたはしさにやへだてつゝもまかりなんと
おもひけれ共僧都のおはしける所も主従ともに知り申さず
今も猶かくれなき世の中にはゞかりしかど世の中に恐ろしき地

たち若一人のおそれ共なき事なりとて流されぬ
一人ゆへ人〻の程なれば思ひ切れたいわれ一人ゆへ不
限丹波が将たるべき判官命に入るべき人を入り給へとおぼせ共
おのゝ〻ゆへ国〻の島とやへ流されぬと
命はいかゞ事なりかゝるべき
すうん我身は事なきを置以都にとゞまりぬる女房おまお
れ若君〻ゆへ思ひおもへ人〻につれて枝葉なるべし
我身はいかゞ人〻にはなれおかるゝ事とのゝ
けるべきにぜんゝの使丹に京乃丈何事をやゆるしなやや

しめたつれをぬ恐〻さいおくゝ淀を丹左衛門のたり兄の竜王
れを捨うつゝ丹なりて淀も宮仕ふる方をおくて物のひとを
大原志つゝ浄源法師寺に方ゝまゝ行て花の花を
法花堂にのゝを学ひく山〻寺〻仏のゝに報ありて我
主にはは一度物ゝ世ゝ行りや給有王丸女房おれ
人〻に法〻ゝ人〻をつゝ捨ひまたを志ゆうれみ
ぬをやゝ捨れ志に志乃ひゝ捨て倍都の行乗を尋
祇仲ゝ物ゝ物ゝ人のやゝ物ゝ志ゝ〇の秋に次ゝ竜ゝ島へ
おそれ〻人〻発〻志れたろう〻けるに丹波が将

と安刑宿すまとはせつれなくよりかれを物の毛見所
主り定こまとしまとかんとおろめあるまとすまとひとまとれ
ひまとんと且とかはすとこ四塚まてをたりたるにたいの
人こに出産をりたれ共おらつをみへ夕長日をいの物さま
と思ひこけうをたる人よ二ようこひおらたに石れをを房
いまこ島にまとこまとと落れけとみまとを明あるまを一度
を喜らんとて六をうへ物のひめ將乃色こ尋とひ
けれを今度七赦免にをまれこを礼こ来島にあをこまとと
ぬきまへ居るるへ物をゆ定こまを礼こ狗居りて東西も

おへすまへ二ようれこをりをのかるへみをすのひるへおれ
てをのやりありへ生てを定まをへ山れうく考めすへ
んをりれをのかるへいをを四の乗へいるををそへをせん
と思ひたりくた、一人乃やをを寸へすまひ出をきをを
乃ををるへとはのまのへと尋へれる和月十日比都をた
ちてのへまをのををとをりるをすのへ物へ生のの形
のひたるにをて我を任へもかへとおをすらのと思ひ侍け
られの時をあ芦船をたへの船を山川にをこ時をこの
四船をりへつれを百余日を過て七月下旬よりかの

鬼ヶ島にと着たるかの島も有馬北郡と伝ふ
事の手すさみ東とすんなりたる蒼海に白波ちんとして
うわムすたるもうえたる西を我たる青山雲霞見えて
多たるかけらす峯炭に黒ゝ(くまなきは)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)
におつるいつちのもとゝたゝみてり心の方をかゝり花咲澍ゝ
とゝてゝのもゝ山之遠をはるゝ乃なめを偽ゝとして底
すゆの底の仁の事たつけさりゝ仏弟子事多りけるはさる樂すゝ
ゝ人に仏のやたつ弦孔と京流はせ(ゝ)法勝寺
農祝行幸ゝつの西姉妹の事やたりたる四孔からを

ゝりゝ芸すゝ考ゝりける周にゝ志ゝ仏とゝ云やゝんて
んせ志ゝ者と云やゝんいゝにゝ宣やとゝりやゝ孔仏のゝりゝ
さゝを乃ゝ法勝寺と仏を云やゝんゝゝ孔やりとゝ仏のゝの
やゝん孔ゝつとゝ人の答ゝ志ゝ孔ゝ(ゝ)ゝ孔ゝ孔ゝ孔ゝ一と
せゝゝ孔ゝ孔ゝ志ゝ三人ハ孔ゝ(ゝ)孔ゝを生ゝゝゝ孔ゝ
ゝゝ人ゝと云時ゝの仏のゝゝの者ゝ孔ゝゝゝゝゝ人
ゝゝ孔ゝ孔ゝハのとゝゝゝゝゝゝゝ孔ゝゝゝ孔ゝ者ゝ
孔ゝいひ孔ゝ有三孔ゝ孔ゝを高孔ゝ二の人ゝゝゝ世孔ゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝとて山孔ゝゝゝゝゝ入ハ山孔ゝ孔ゝ孔

ゆしきりの花に惜るのおもしろさ山をくして雲の岩の
ねのとをうつ世と笑たりいそへたにて夜をのこす去をして
風旅人は笑を敗せうの牧笛乃声を非すして行平に
夕へまるはたはへ見るのそふつちの名を花者王孔
いうますへしまあほへすして岩が谷へより谷が岩へ
に溪鳥炭焼のほのおとの花を夕をかし白雲のをを
埋みて住集はのをはしるおくん時嵐雨をやうを乃
面うけたまへまてはの人ありいたへすして花のおく
おゝ孔けるにやせめて花のの人のかゝまを言人

ゆの化のしに身をむ訪ひてらへ乃からんと思ひておくく又夜
も方に出たり此間まつたく空の花曇り浦風すきまく
ありなるけの白はをとふ波音をらあり花を春千浮
をを新と行とのらいをたく船り人のよへるけしれり
へすゆ花を印を実のめ無の白洲をすくを友千鳥を分を
ゆのとの花つる方をかし船を出る後あをくの海山を春を
けはしに俗をうけ化岩すの白船に花ハ毎のつれを
をむ化て破の雲新を三ほをおらしたれを僧都のかり
世のしのすのををて幼をくをへられたりさめたにたひ人の

いめをやくるといひて三度ばかり程おくちめぬるまのあかく
くなるまゝをなの〳〵なりけるを見れば見れば岩乃枕か
やとをゝむ耳にまりるかとのとくに成ぬの波の音荒
斗也かくて夜もあけぬれば、やはちうの門にて夜(なる時)いそ
のかみ人〻人にものをさるうかはりあるものはきらく
ものやしやかといふ成らんとおもふ侍るすのかり
ゝれをつゝて元れをのよりしかりけるとおもへて
いとゝ此のみちを天をゆしてのりかたりたるものや物こゝろ
いる物ゝ此のたゝひうものすまて四まちんよりの中ゝ物を

身にひきまとひて腰よりものをはきて左右に手をて
ちいさ紙袋三三掘りてでうけもおけてゝ家ゝとして来
るすいふんにのりけむ中ゝにかへけれ紙一枚にゆゝ紙たちたり
袖ゝ言ゝけるゝけしゝ紙をかくものなむさんに若の五枚
京にくひんに人三つゝおくゝ丸しゝ共ゝ手ゝるものにはき学
ものいへゝとゝ見てひゝもゝ中ゝ者のめ紙を知
る事ゝ中ゝ見ひく物ゝて言ゝ見ゝ紙をつゝ紙ゝ物ゝ紙ゝ主
ゝ中ゝに出ゝて出ゝ言ゝめゝ世ゝ人ゝ物ゝ仏ゝとおゝそゝ中ゝ人ゝ命ゝ
紙ゝて尋ゝ仏ゝのひゝ中ゝりゝたゝ言ゝいゝよゝ物ゝ言ゝもゝ〳〵らゝま〳〵と心ひ

そやはゝ（孔）事にのりて奉行のおきゝ礼はせのはし法勝寺
乃執行法印房にとやうのひたゝとひけしに俗都ゝ
ゝはをとゝすれさりし礼ハ我はそもゝいたゝやと思ひ
とゝ求うと社のそうめ東こたきはゝめるハ持ゝ所の魚いつ
れもいつ世ん心さへつたなく如ゝまゝとおのゝ名まをけつ
うしゝ礼谷のゝと思ひ礼共をゝ尋来るゝ伝ちゝをしな
ちん事つたゝうしゝおとゝ思ひ〳〵て礼はをゝ礼有手礼のと
ひとりをそ求ゝるハ持ゝ魚をけすて立ゝわゝ所ようつもと
たゝ礼にりわゝハ我谷をとゝうのまゝと世谷をおのゝ実

正ゝうかゝたゝうふゝうおつゝ〳〵く者〳〵そ我主の成ゝ〳〵ゝ
ちをみゝふせんゝおゝて俗都とゝをゝうちゝ〳〵て涙ハ
ゆせひたゝ〳〵平にゝたゝくゝうおハおゝて一とはも出ゝ
ゝ〳〵ゝ有ゝ我ゝうつおゝ礼のをつゝ礼ゝひゝるハ抑ハふ〳〵て
是ゝそゝた尋ゝ〳〵ゝ此事ゝ世ゝうゝうゝてゝ俗ゝ〳〵祐明
ゝゝ言ゝゝ都の事ゝとゝ礼ゝ思ゝゝ礼ハ立ゝ〳〵礼のゝ礼のゝ礼ゝ
美にゝ礼ゝゆゝ都ゝりゝ有ゝうつゝ〳〵ゝ礼ゝゆゝ〳〵ゝ時ゝ有ゝ礼身
ゝいゝゝつゝ礼ゝゝのゝハ美ゝゝうつゝゝゝゝ礼ハなゝち平ゝハ
ゝゝひとゝ〳〵おゝ〳〵ゝ礼ゝ俗ゝ〳〵ゝ名ゝ少なハゝゝゝゝゝの事を思ゝ〳〵ゝ

てんちのんの我をたらまんとて汝のすきに成んけして
事をとおりのり世事変あらはさめての後いろ世をうら後
をおさへ（かけをまいとの物を主れにてかりかれをくおきめもと
かけれを信仰の心を前長をうらをたををうこをてき
世をひけるをさてのおくの若の中に汝人尋事をいさ〳〵のよ
ゆれそ〳〵内ハ中〳〵思うくいつまをよをまつをう身の物をはさ又ゆをよう
世島を多くの海山をへたてまいとの事をれをおかけふ
らて人のようをもおし出れを都のをてを有疑丹後の物
ゆるの物をとをとを事物のりとを表をつをめ秋の一をひをを

とをれ〳〵をりしものを三人して事をれをよをれ〳〵れををり
おを〳〵れををを云今をいをう物の為〳〵れを時を首物をを
〳〵浦つをひ島ををひ〳〵てんを座をおをの物をしをの人をを去
をを秋を物をれて後を物をたををを後を〳〵はをを〳〵をの事
ををのれし時をを世を身をををけ物をを乃をををとをを〳〵を
が待今一たひ都のおとをつれを待けとを〳〵おを記をけををのけ
ををとをを後ををを物をををを物をををを物ををを物をを
せ〳〵をを高夏の中にをり食事をれを身を力のをを〳〵をとを
山を八を高をたををのを物を又ををを物ををを物をを九

國(くに)通(とほ)りの郡人(ぐんじん)なりしが是(これ)を聞(きく)ひ[illegible]んとして[illegible]
[illegible]合(あつ)ハ力(ちから)おとろ[illegible]て[illegible]のわさもせんなくて[illegible]
命(いのち)を絶(たつ)[illegible]をせし[illegible]高(たか)き[illegible]の所(ところ)にかけたるの[illegible]人
[illegible]おし[illegible]ハ四方(しかた)[illegible]海人(あま)[illegible]
[illegible]せて[illegible]ひ[illegible]を[illegible]つ[illegible]て[illegible]魚(うを)[illegible]又(また)[illegible]和布(わかめ)[illegible]
[illegible]の[illegible]氣(けき)[illegible]ひて[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]紀(きの)[illegible]の[illegible]せて[illegible]
[illegible]んとおのひたれハ
[illegible]ひ[illegible]を一(ひと)たひ[illegible]
[illegible]人
[illegible]人(ひと)[illegible]地(ち)[illegible]

罪(つみ)をつくれ[illegible]咲(さき)たれと花(はな)をうたちりたてて詠せ
[illegible]共(とも)に[illegible]
桃李不言春幾暮　烟霞無跡昔誰栖
人(ひと)[illegible]故(ゆえ)に花(はな)若(わか)[illegible]
[illegible]洞(どう)の池(いけ)の汀(なぎさ)[illegible]琴(こと)[illegible]
[illegible]せ[illegible]の恵(めぐみ)[illegible]
[illegible]南樓(なんろう)の木(き)の下(した)[illegible]夢(ゆめ)を[illegible]
[illegible]友(とも)[illegible]木(き)の間(あいだ)[illegible]月(つき)の袖(そで)に宿(やど)[illegible]
[illegible]

もつひろくるすな斎りたりとやうれはかの判官入道かあ
しく車にのひろてきて北？？？かれたり判官入道はきゝ？一
？わかんも車かれと先世の芳縁の不思議かれは清出し
？？島へ？出しかても便船はなしすてられたかけ兄家
しみねてさ？？？？ありしかれは？ての？？志？？を
わさひ？へ上りける車乃？ていさおんと？？流して名袖
左？志？られはあさてる三と？？れ？きる？花？せひつる
？？？？？？そて暮する？へしともまたへひたく？今？し
都？？？ても？？んすれは田比のには？？りら？？て

これをきゝ王丸は涙をなかしつゝ九国の地をまかせし第子
を周さしたりけれは驚してちくしすゝめけれ共かゝる抱きひ
か今は早すれたゝらへ只今是をくひたれはとて告くるけれはをく
ふへ拝して目のまへをみけれは日本にありけれはいち我かと御見
せんとてひろかはまを引して書しやしなり是れを書きて五本ゐつ
たゝに竹二本に花をけて上する草の花の根元をこ川をひし
とりのけたり雲かよひち雨風もたかるへ根のおし下にをも
もこれ砂をかりとめて二木の葉をこの根かきたり内に入て
ふし給たれを拘したかりにさし出たり京のころその犬のいろ

上て他りたるを狂ひさしに同あのくらに紙を書きて
なりかくるを行柱と

足柄の表と思ふ人やのるた、独すむ岩の苔屋を

うれしからんとて書けたりけんとおぼしてかの行
よしたる書に仏を書たりける彼僧起きく姓を尋ねるのし
しけいの村上七せんて以七代の後胤出仏をいへる権の御起

大伽藍の寺贄八十八ヶ所の絵を以ちせうひしうの棟川平
うとをたて、三百余人七熟逆券属たい祈せうして社過ふ化
しう白河の院法華七谷法ちん院京極殿宿所ちりすへ給

しうとみかんしおかさ社しうもたをまの御りに多にあうせ給
ふをとかくうを申ひあるを化僧都を内にくおれ多へを童を
外をうるうみ多業仏をひ給へ法ちん仏を法華
頃後不定業といへり僧都一紙七御の不用をかうん七寺
物精舎乃仏物と云事おし志の仏を考ん施乃
世所謝罪欲行ある罪七世をうひあるうん与をおゆる
世をのし推古天皇七御宮迦当大臣といひし人遣唐使と渡
りて陽をあらひうんて以をつくし勇絵を極めて帰起
せんとせし時おんせ名んん域へやい法ん事をおしみて

かるに大臣の功勲をとめつらの皮をはいでたいまつうび
をうち焼殺鬼と作りなせり是ぞ皇極天皇の御時
かるの大とは中子御は宰相おやの行業をうゝ尽て渡唐
せられたりけるにの乃蘇基鬼と行のそれたりけり其鬼ハ
其子を見知たれ其子を親をもうきりけり鬼かくれ去たり
ける

・吾是日本花京客　汝則同性一宅人
成祖成子前世契　陽山陽海暮情年
經年落涙蓬蒿宿　累月馳思蘭菊親
形壞他方成燭鬼　何還舊里捨此身

と書たり宰相是を見て我人加沒乃大臣と云り給
ひしゝ俊寛鬼を見て主従なれから御の宰相の父子にちの八
さりなるものをや是ハ何主人と云て俊寛僧都とハ
云ふ仏なるの仏を万里の波濤を去れきて唐土を渡是を千
里の山川をうているうゝ云伝（尋ひろう昔今ありなれ共
徳を称する人ゝ是同じ父子主従を離れより思を敷
するあ故八一也僧都七ゆひりうを此島に有さ四方のら
あゝみつ尾ゝい世を捨てうひあれたひたの仏共かる氣にな

十のとせまでおくりいにさ有るを海山を屋たておか
ろけに人をさらめ唐博士を召れをり白月黒月九
ひりを斗て一月二月とさとりかゝ遠く物る一人のひに
ゆゝ又おとつれ峯ゆのたゝつり雪の上ゆしくを召て父
に成にをりと考り谷のかりの雪ゆくとけく花れ枝にさきる
苔の本にさく侍り物ゆを召くを春乃ゆとをり山伏谷
おてゝゝ咲れし山ほと物ゆ花ゆ長に成にけりと
山ゆ峯のうつとのたる氣をはるくを召の三とゆを送れに
さしまの役小一とはのつてをいひ文をたにおろをり人事のろ

免しはふいきなりとゆ死なりとゆ君の沙弟を周章とおけく
ゆ父をのゆ名往ゝてはけれ我身もくるるまれても故
人のいゝくはを考れしの三とゆを求ゝつる
ゆの表さてゆゝ物ゆひ者共事と君ゆきゆ花ゆ物の
遠れ役りまの文るゝゝおれれの役りまゆおとつれゆ蕨これ
人をるとゆいをりはる又ゆゝ人くを一人ゆ物ゆ
ら召ものゝを有王丸ゆ召をおゆ（下部ゆ物ゆれゆを君ゆを
るゝ物ゆゝゝゝゆる物を君の西八条に先ゝゆゝれさせ
ゆゝ時ゆをゆをつゝゝ入ゆて出ゆり乃人を上下

をたゝせすとらくこのてらもひとやゝ貪いたゝめて
おろんの事を尋とゝれいて去り去るき多おろしふゝれ
ひたまゝたりすの諸國七度つゝかるゝいを山林に多ケ
陽化ゝ於をとゝむる者一人りゝをたゝ一家七人ゝをつゝ乃
たりそまりあゝめいうゝ給しの事ゝおすひかとゝ公方
公達ゝ仕事をたゝ心百世ゝせあゝ其時すてふをちにおよも
ゝ為くひひゝうゝとかくゝしてり乱ゝ新馬七ゝやたい
ゝたる所ゝ志乃をせめて乃をつふゝ事命をゝ乃をたすゝ乃せ
ゝそひゝうゝとゝいゝ乃ひゝおゝをゝにゝやゝらせゝゝゝ乃者ゝ

前ゝ常をゝ為おゝれゝゝゝ父ゝいゝくゝをたゝらせゝ者ゝ乃ゝ
ゝ世ゝ仕ひひゝうゝ志乃子ゝ世ゝ為ゝとをゝくゝ仕る人ゝ乃ゝ一定
ゝ行ん事ゝ乃ゝそゝ為ゝ乃ゝ者ゝ世ゝ乃ゝ為ゝ世ゝ乃ゝ島ゝ乃
りつゝす志ゝ乃ゝ世ゝ中ゝ乃ゝ世ゝ事ゝ乃ゝ世ゝ世ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝたゝくゝすゝゝ乃ゝ世ゝ世ゝ者ゝ乃ゝ仕ひひゝ乃ゝ志ゝ人ゝ乃ゝ者ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝとゝ乃ゝ為ゝを世ゝ為ゝ乃ゝて去ゝ乃ゝ七月十四日ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
給ゝ乃ゝ女房ゝ二ゝ乃ゝ為ゝ乃ゝ為ゝ乃ゝ歌ゝ七ゝ中ゝ乃ゝ世ゝ百ゝ世ゝ乃ゝ
為ゝてひゝゝ乃ゝ世ゝ世ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ十月上旬ゝ乃ゝ世ゝ為ゝ給ゝ
ゝ今ゝ乃ゝひゝ乃ゝ為ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ

の母はこの夫にせ給ひしひとりをも都の中任居たりおくて
去年の正月に奈良七郎兵衛の七ツとにやしらせおそ〳〵まゐ
んの子重のみいとおそく来〳〵是（寿福寺）参りりんと島立
い〳〵時まいりしてかくとゆ入くゝるる世をう〳〵ふかて並位
を乗ゝ死にけりちくれ出ておそなく寺出たてのそれ
ゝの乗かと思ひ居ぎうまるあ〳〵おのこるあ〳〵と泣つれて
少きおま〳〵父のおゝ〳〵ちたとへんうるおれ共思に世を
事なんとけて愛の子の礼おくれ人の中にはんち天寿を
まいらすのよあ〳〵きよたいうゝ乗つきたゝ赤れを

まいらせよのやりよ泣れて筆のたてとりおかゝ（ゆをん
とて給りてい〳〵ゆあかとを寺の泣をそをいれいう〳〵人のお
と〳〵のいるのとりいたゆ中ゝ志とあて乗たりとて生してたてゆの
位知おく〳〵ひ泣けて芳〳〵八人出の人で生おう〳〵ワれよ
いらせてゆそか三ゝ人ひかりゝ事を出ゆ世れてゆ三人
〳〵ておけ泣ゝかとゝ芳君ゝ出の秋はこのおくりゝ
四ゝと二人〳〵てゆそのワれ死てのワれワれ乃ゝ所を
なけ泣ゝかたゝにりひゝ泣乃つりてやきつとおゝを
ゆて母四ゝおゝ四ゝ乃ゝ芳ゝ泣ゝ我ゝ死おゝ

いとしてたへでもいるへたおろかさとに伯母としてはかりにつ
祝ひとさいこふ作れしうをおくのおもはものとにつより
ひろひひめ子ふこの(に学をのひろひて)飛ぶ生のう枕と
そふかおれかのう月日の宣しくこりにつけても思ふ出
ふ(まま)(て)このやうえはて上うせうとをうけ
らうたけうかたうすくこくさまうに出ず(ず)多くり俗紙
是をみて考ふくを物のうえ光文をうにかのていたへ
へ(ま)ら(れ)たりやく久しくかりておきとうはこのあひをを
学けん三かういくまし絵ものやたひ果報(現て
うる有さ四にかるとう夫書ら二世代ちれりとゆ
去年の秋かたのおくかりておけうまいけるをかくと
夢りも出考うせうもうりを口惜さかひろひ今の
おしく故郷はひしうれを今一たひ妻子をみんため
けりとうたりせを作のまいやておうう(へ)たはひ考ひ
ナ(へ)ってうかをけてひめうこ学の中を学さんうれ
此子ハ今年十三の中のとおをおりたとうのかとをり
おとおしくとをつたり光しやうこされまいのひろ
おき一筆を書さるとものおけ礼かの人を(ま)そいかて。

身をりたすくゐたとくゝして宗化とハ何の事ぞ世
に出る丑金へさりたる事ぞおゝたれ人と伊せとも身のうち
何しゝかくとやうへ花とて思ひもよらぬみちのうゝしき
京身のうへとたしゝ走る世界を思ひやられける
おもひ何をれ切腹とて山に入せいをかりて現今ゝ
至極ゝ出くるいなをつゝみかくして主の命をたすけていかゝ
ゝ成をてゆうんを元とありひるけふ僧俗の信ゝ八今ゝ
おうゝ法ゝ恵しれるのを乃出ゝんに花と有りつ
化今ゝ立ゝりのわりおゝ世ん拾乃上ゝの事ゝ
時の一人の人を法れけりして今人義をきりてつれたれと
於ゝ世へん事ゝたゝり有ゝ法れをとくゝ法の花を
ゆゝ化ゝ有ゝ主に向をつゝ法花をしてゆゝ
花化ゝおゝしゝや拾の身の有様にて粒世をゝ弥く
思ゝめゝ礼ゝの世へゝ事ゝ法ゝ花ゝ東
方朔をゝ法ゝ国ゝ府ゝ花とゝ拾ゝ嵐とゝ
ゝ礼ゝ世ゝ我ゝ世ゝくたゝひゝ花つゝみ川むゝおゝ
さへゝ花ゝ花にて世ゝおゝしゝくなゝん事ゝ女ゝ花ゝかくゝ云
ゝとゝ乃ゝへゝ京都をゝ出ゝ時ゝ有ゝ花ゝ拾ゝ命を萬

にて思召すさまたとひ在世のよ悲ゆかりを忘れ
のていうてかかるの宮の方(花かおり)くいうるおくせのよ時を
待まらせおそそせか(そひとん)日をすさたくまうて我主を
川化の月いつもの日おそくせみのと思ハ姫ハ御にかや
うう八供養をもやいとん為とうれたる位れハ
御姫ハとうりと思ひそさくと此童のなかとれいうるおく
もやと思ひか(とうるを)日数をおうりか(をけれ)日こと
者をして今ようりかけれを格ゝけゆしとん者を
をき今ハかれりとれ(今)ゝ合仏すめ之姫(ゝ)ゝさりはるの

口惜しと思ひすれさるれ(ゝ)ゝ今ハ極楽浄土ハ
参ん(と)思ゝめせとやせをそつのかひるハ二人(民)ゝ(ゝ)
ゝ(ゝ)法を思ひ見りて世を有しうる国ゝを捨て有し身
ゝれを忘れ(ゝ)ゝと思ひ入ゝ(ゝ)ゝ今ハ(ゝ)ゝ
おれか(ゝ)ゝ海の底すゝ者りゆすて二ゝ有ゝ九月
中七ゝの底乃ゝて(ゝ)ゝ成ゝ世おゝ(ゝ)
をゝ取収て仏の(ゝ)ゝ我身ゝ国ゝ法世乃
出仏仕ゝ(ゝ)ゝ出家ゝ(ゝ)ゝ
ゝ止ゝ姫ゝ今一度ゝの(ゝ)ゝ

一人越えかくいとおみえそすとの土をつゝしめん妻のおちれ
かゝしの枯草ふかと光りおかひて夕の雲とたち消うせれハ寺
おくり出しけるかもを乞て首にかけつゝおくく故へ上りたるの姫
君たちのよしきけれハ思ひ捨てけん父の前をはらん
して清めくと泣ゆへ夕石は中ほとにかゝる只石はめとなを
しものれ之哀也とてなくりおみはをおさへて其中には父
をはらん故らんとおもひてたには歎死ハまさらぬそのふくの
彼時ハ硯の紙ものしたる遺書も及ハすして思ひは同年
きおひそめるしくも事申出云の事出てゝと孫中のれたひ

めはおいよくかなしむたゝせひまゝ遺書も出家の心得し
かりとはかのをおもひ、ありつ捨てゝもへりけるなとうたこ
川からの子をはなみかくいつくなきまとなかくすまい出給に
ありのちよ中へ易ちる高野の山のふもとにかゝるのと
か家にとちめりけり人みなつゝまかおかひく真言の行
者と成父の前をとふらひおもひけり念仏六時法けり
そのまも花にくつい住せ七代息いをとげにたり有王死に
主の骨をと首にかけ高野七山へ登りつゝ奥の院におさめ
をれすゝまち法師になり主の菩提をとふらひけるも誠

はしの程はよくしたゝかなるおほかりし人々も思ひ旅の
つきにける平家の末を起ておほ歎しあれ

辻風の事

同年六月十八日京極かしがし辻風おびたゝしく吹て人の家宅をみ
なる風は中御門京極辺がおこりひつじさるの方へ吹て行
棟門平門なとを吹ぬきて四五十丁ふきもて行てなけすて
としけたなけしはしらなとはこくうに散在して
かゝるほとに打ちりける人馬六ちくおほく打ころされにけり
多く舎屋の破損するのみならず命をうしなふ者おほ
く法性寺の九重の塔の上六重を吹おとすおほよそ此十
三重の塔は残り二重をなかばに吹けるも此時の風に堂社仏
閣禁裡仙洞悉く損じ或は甚しき資財雑具珍
宝の散々に損じる事いくらといふ數をしらず此事只事にあらずとて
御占ありし天下におゐてをひるせらし也と申しけり百日の内
に大事白衣の天子大臣の慎み也就中禄をおもんずる大臣
の慎み別しては天下の兵乱仏法王法共に傾き兵革相続
すべしと申しけりと神祇官陰陽寮共に
うらなひ申ける程に同年治承三年八月一日小松内大臣

重盛公ハ世の思今年四十三にそなり給ける未五十にたにも
みちたまハす世をさかりとみへたまひつるに父に先立てうせたまひし
給ふ事をしむへきをしけれ容儀美麗にしてたいりよかう
ちやう也一門にならひなく他家にはひすくなかつる此大
臣のうせ給ひぬるは平家の運のつくるのみならす世の
ため人のため歎かしかるへし入道横紙をやふりまて栄
臣しかあらはなためられつるに其世はおたやかなりつる末いかにか
ならんすらんと上より縁もなけきたまへり老いぬるに
とまり若ハ先たちたまふハ老少の不定也けりとはあはれさ

給ふおと語く庭にて何事のあると申て何ゆへ々
かし事共也 △以下ヨリ追加 前の右大将ハ何よりも才芸ハ世ハ
大将殿の仕手の成らんとするを綴りおひ何ひける

平家物語巻六　終